

スミセイライフフォーラム **生きる**

いのちを ささえる うたと ことば トークリサイタル

長野市ホクト文化ホールでのスミセイライフフォーラム「生きる」は7月に永眠された永六輔さんの作詞曲「遠くへ行きたい」の歌声で幕を開けました。



新垣勉さんは米軍統治下の沖縄に地元女性と米兵の間に生まれました。生後間もなく過失事故により失明、また1歳の頃に両親は離散、祖母のもとで育てられることとなります。障がい、いじめ、貧窮など逆境の中のなかにあっても盲学校の先輩や先生のアドバイスを素直に受け入れ、英語、点字、大好きな音楽に、すくすくと才能を伸ばしていきました。

しかし14歳、祖母が亡くなると新垣さんはさらに過酷な境遇へ。絶望とそこに自分を追いやった大人たちへの憎しみに自分を見失い、自殺まで図る心境となってしまいます。

新垣さんの人生のターニングポイントにはいつも「うた」があったといいます。ラジオから流れる美しい讃美歌を自分も歌ってみたいと訪れた教会である牧師に出逢います。唐突に「アメリカに行ったら父を探し殺してやりたい。」との思いをぶつめますが、牧師からは慰めや諫めの言葉もなく、すすり泣く音が聞こえるばかりでした。新垣さんはただただ涙で共鳴してくれる真心の存在に驚き救われ「もう一度自分なりに生きてみよう」という勇気を与えられました。

その後、大学で牧師となるべく神学を学びながら聖歌隊で歌の才能を磨き、さらに世界的ボイストレーナー、A・バランドー二師のレッスンを10年間に渡って受けることとなります。同時に沖縄で始めた、素晴らしい歌とユーモアたっぷりなお話による伝道活動がクチコミで評判を呼び、全国から来てほしいという声がかかるようになります。新垣さんは大きなカバンひとつと杖1本で神戸のバランドー二師のもとへ、全国の教会や学校へ、一人で旅を



♪ 第1部 講演「私を救った出逢い」

♪ 第2部「ハートフルリサイタル」

講師 **新垣 勉**

2016年9月4日(日) ホクト文化ホール



続けました。初めての東京へは50時間の船の旅。たまたま船にあったピアノを弾いていると乗客たちが次から次へと共に歌い始め、果ては頼みもしないのに誰かが空き缶を置いてくれお金が集まったとか。苦労をものともせず、明るく前向きに突き進む新垣さんの冒険談に、会場は時に爆笑を誘われつつ魅了されていきました。

新垣さんは青少年に「オンリーワンの人生を生きる」というメッセージを伝え続けています。オリンピックのように高い数字やナンバーワンを目指すことも成長には必要なこと。しかし長い人生においては人と比べなくてよい、それぞれの人が持っているオンリーワンの個性を大切に、自分らしさに磨きをかけ続けてほしい。それぞれの出る幕で、ひとりひとりが輝く主役を生きているのだ、というお話で第1部を締めくくりました。



第二部、ハートフルリサイタルでは「オンブラ・マイ・フ」などのイタリア歌曲をはじめ「赤とんぼ」など美しい日本語の歌を多数披露。フィナーレは寺島尚彦さんの「ひとつだけの命」「さとうきび畑」で平和を祈り、鳴り止まない拍手のうちに心洗われるひと時は幕を閉じました。